

機関番号：32412

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520031

研究課題名 (和文) 前期「近世神話」論の形成と展開—倫理思想史の観点から

研究課題名 (英文) The Formation and Development of the Mythology in Pre-Tokugawa Era—from a Viewpoint of moral Thought

研究代表者

清水 正之 (SHIMIZU MASAYUKI)

聖学院大学・人文学部・教授

研究者番号：60162715

研究成果の概要 (和文)：本研究は、近世徳川期の知のひとつの形態である神話研究、神話論について、その形成期である前期を中心に考察するものである。前期とは、本居宣長の『古事記伝』を近世神話論の劃期に対して、それに先立ち影響をもったいくつかの神話論・神話的思考を明らかにし、いくつかの流れの内在的な特徴をあきらかにするとともに、宣長を中心とする形成期との比較考察などをこころみた。

研究成果の概要 (英文)：In Edo Era, the Studies of Mythology were formed. The representative is Motoori Norinaga's study on Kojiki. This Research aims to analyze the Mythology or mythological Thought in Pre-Edo Era, viz. before Motoori, and its Formation and Development.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：日本倫理思想

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：近世思想、神話、倫理思想、神道、思想史

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、近世徳川期の神話研究、神話とめぐる思想、方法について、中期の本居宣長までの思想史のいくつかのながれを考察の対象として、倫理思想研究の観点から、あらためて検討し分析をこころみるものである。

(2) 本研究は、すでに学問的タームになっている「中世神話」に対して、「近世神話」論というジャンルをたてること自体を課題の一つとしている。近世思想の根底にある神話ないし、神話的思考への関心という観点を

たてることで、近世思想に対してより広い見方を取ることができると考えた。

(3) 近世神話論は戦後の学問的なタブーになってきた面がある。その感覚は今も残るが、学会の場では、いままさにその意味を再検討しようとする機運が起きている。応募者自身も学会でその方向からの問題提起をしてきた。

(4) 近世後期思想としての神話論には、少しずつ個別成果が出ている (東より子、前田勉等)。しかしそれらがなお個別の成果にとどまるのは、近世思想史全体に渉る俯瞰図がないことによる。宣長以前の神話論を宣長がど

う咀嚼したかがなお十分にはあきらかでないとともに、中世以来の『日本書紀』による神話論、また近世の神話論神道論、新井白石等の神話論、儒者の神国論神話論を、後期神話の議論に対置させることで（連続性は多々ある）、問題のひろがりや深さをあらためて位置づけることが可能となろうと考えた。近世の倫理思想史の読み直しも視野に入る。倫理思想史としてみることは、宗派・学派によって対象を分けるのではないかたちで、知の分断をこえる意味がある。

(5) 国際的にも、近世神話論は、関心をよぶ領域であるが、山崎闇斎・新井白石の政治性が主として主題となっており（H. オームズ、K. ナカイ）、それとハルトニアンなどの後期神話の民俗的心性と幽冥観に寄せる関心とが、接点を持たない状態が続いており、前期のとくに新井白石の再検討は、政治性のみにかたよったみかたを修正し、あらためて日本の神とはなにか、という問題と切り結ぶ端緒となりうるだろう。

以上が研究開始当時の研究の背景であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、近世徳川期の神話研究、神話をめぐる思想や方法について、中期の本居宣長までの思想史のいくつかのながれを考察の対象として、倫理思想研究の視点からあらためて検討し分析をこころみるものである。

(2) 本研究では、近世後期のあきらかに「神話」論と呼べる実質をもった議論との連続性、近代から神々の物語に向けた「神話」という問題意識との関連を考慮し、すでに学問的タームとなっている「中世神話」に対して、「近世神話」論というジャンルを立てることを課題とし、あえて「神話」という用語を使用し、その可否自体の検討を目的の一つとしている。

(3) 近世の思想史は、儒教の影響下でのいわゆる合理的で此岸的な傾向をたしかに一面で有するが、他方で、日本の神話をめぐる様々な立場の思想・研究がおこなわれ、思想史の重要な特徴となっていた。「中世神話」に対して、この近世の神話論は、テキストの読みと解釈から導き出される。倫理思想史として、神観念・人間の把握・心と超越・世界の構成や組成という視点を通して、儒教・国学・神道・というジャンルによって区切る思想史ではない見方を提示することが本研究のねらいである。

(4) 近世の神話論をめぐる状況は、ほぼ三期にわけられる。その中期にあたり、かつ転換期となるのは、本居宣長の古事記研究によってであった。宣長の『古事記伝』は、その浩瀚さによって画期となるものであった。このことは単に、難読のテキスト『古事記』の解

読に一転機をもたらしたというだけではなく、宣長自身の問題意識は、中世から近世の記紀研究の総覧的なものをめざしている。しばしば新井白石を引用しているが、白石に喚起されたこともあり蘭学への関心もちつつ、切支丹の神話（天地創造、苦難のキリスト）と日本神話との比較対照という白石の関心の影響をうかがわせる点もある。また、『書紀』に関する先行の諸研究からの、言語、地理、宇宙像など、その内容は中世末期から近世中期までの、諸潮流に目をむけた浩瀚なものである。この点もさらに検討を加えることも目的となる。宣長による神話研究の転換は、しかし、その後、完成度の高さもあって、正統な後継者をえず、平田篤胤以降の国学者はふたたび『古事記』をはなれ、『日本書紀』に関心をむけていく。

(5) なお平田篤胤は宣長の死の救済の否定に異議をとなえ、新たな思想を展開するが、『古事記』テキストを離れ、自ら信じる神話を「創作」し、あるいは中国書経由で知り得た天主教の教義を組み込むことで、死の救済の神話を構築した。その後期国学の神話研究は、とくにその国粹的な点だけが後世、誇張されるが、そうした先入観によってはくみ取れない意義をもち、日本人の倫理観、宗教観の表れとしてあらためて評価されるべきであると考えられる。この点も前期神話との関係のなかで考察されるべきであろう。

3. 研究の方法

(1) 本研究は上記の見方から、近世徳川思想の神話への関心を、その『日本書紀』によって説かれていた前半の流れが、中期国学、とくに宣長の『古事記伝』の成立によって、それ以前の諸潮流が集約されていく、その集約の過程と論点を、テキスト内在的にしめしそこに反映する近世前期神話論の諸潮流の展開と意義を見だし分析するという方法をたてる。二義的には、それによって後期国学にあたえた影響等を、従来とは異なる視点からしめすことができると思われる。

(2) こうした観点から具体的には、①切支丹の説いたキリスト教神話がどう伝えられ、解釈・評価されたか、また、②近世初期神道派の神話観と中世神道との連続非連続、さらに③林羅山の儒教的神話論、反切支丹、反仏教神話、あるいは、④神道と朱子学の混淆をもくろんだ山崎闇斎の神話解釈など初期儒学の神話観、そして、⑤とくに宣長に直接の影響を与えた新井白石の神話観（『古史通』等。これも儒教的な神話観の集大成という性格の書である）を検討する。

(3) 中世神道論を精査し、とくに近世の宗教世界の展開と共になぜ中世神話が意味を失ったかを考える。中世神話の生み出したもの

に「苦しむ神」という像がある。和辻哲郎の指摘をまつまでもなく、苦しむ神という観念は、切支丹の伝来によるキリスト教の受容の際に、キリストの姿にも共有されるとして、受容のもととなった面がある。キリスト教の持つ神話（創造神話、キリストの受難）がそれなりに理解され、キリスト教受容の端緒となったのは、東アジア（中国・韓国等）での受容史のなかではみられなかったことであり、日本の特異な特徴となっている。中世神道の、近世への連関という視点からの研究はほとんどなく、重要な問題である。以上の見方から、中世説話の知見を整理する

(4) 近世神道論を精査する。近世の幕府の政策は、反仏教の思想を普及させ、一方で、儀礼としての仏教を強制する。それにあわせて反仏教論がさかんになり、他方で神道論がさかんになった。吉川神道はそのひとつだが、神道論としてはある程度の研究があるが、神話および新解釈に焦点をあてる本テーマからは、なお検討すべき問題が多くある。とくに吉川神道は山崎闇斎に強い影響を与えたが、その神話解釈という観点からテキストだけでなく、従来の研究を精査してみる。それと関連して、儒教的な神道論の検討が必要となる。藤原惺窩・林羅山らは、神国思想を前提としていた。その神国思想は、反仏教と結びつくと共に、反切支丹と深く関わっていた。またとくに儒者新井白石を丁寧に調べる。かれは神話を「古史」（古代史）とみるが、かならずしも儒教の合理主義からだけではない。彼の切支丹への関心、知識は同時代の人の比ではなく『本佐録』などのキリスト教の影響を受けた文書、排耶書等にも通じていた。白石が、記紀神話の神は人である、と主張したことは周知のことだが、「日本の神仏は人である」として彼らの「デウス」との違いを説いた切支丹の説にも、影響を受けたものである可能性は高い

(5) 宣長に先行する国学の神話論を整理する。宣長は『古事記』研究に着手し大成したが、すでに荷田春満等が手を染めていたこともたしかである。それとの宣長の連関は、かならずしも従来明らかにされていない。あるいは宣長の同時代の谷川士清（『日本書紀通証』）はとくに宣長に直接の影響を与えているので、その解釈の特徴と、宣長の撰取と批判と検討する。

(6) 宣長の『古事記伝』を読み進める。以上のような諸潮流を、当然に意識して書かれている。またとくに神話解釈に際して、音韻論、文法論等の言語論（朝鮮語への関心などもふくまれる）が重要な意味を占めるが、それらは新井白石や、谷川等の先行者から、受容しつつ自らの見解を作り上げている。その観点から検討する。

(7) 宣長に先行する谷川士清を継続して調

べる。言語論に谷川は局限し、神話と禁欲的に解釈するが、白石とともに宣長が、再三引用する意図をさらに、明確にしたい

(8) 宣長は『古事記伝』自体では、禁欲しふれないが、日常身近なところに世界地図を常においていたといわれるように、現実の世界認識に関して、多大な関心を抱いていた。その世界認識と朝鮮半島など東アジアとの関連など、一見すると和合しない面など、先行する白石の世界認識、東アジア認識と関連させ、考察をつづける。

(9) キリスト教の「神話」が、必ずしも東アジアの日本以外の地域、とくに中国では問題とされず、キリスト教受容に際して、伝統思想との間で、肯定的にも否定的にも論点となるということはなかった。その点で 16 世紀および 19 世紀にカトリックにふれた朝鮮半島ではどうであったのか、天主教（カトリック）に入信し流罪となった儒者丁若培らの周辺を研究する当該分野の韓国側研究者と意見交換を行い、資料を調査する

(10) 本テーマは、単に歴史的な考察に終わらず、広義の宗教性、たとえば、「一神教と日本文化」という現代的な問題にまで、およぶ広がりを持つものである。また、研究目的の項でもふれたが、学会の研究状況が、いささか足踏み状態である近世後期の神話論の見直しにも、重要な示唆を与えるものであると、考えており両者を、わかりやすく結びつけることをとくに最終年は、その現実化に一步でも進むべく方法を吟味した。

4. 研究成果

3 年間の研究を通じて、①中世神道論と近世との接点、②切支丹との接点 ③近世神道論の再検討、④儒者の神道論の再検討、⑤先行する神話論を検討しつつ宣長の『古事記伝』を、近世前期神話論の反映と批判として読み直す、等々の方法としてあげた研究の具体的な遂行計画に応じた成果をあげることとなったと考える。とくに、このテーマを考えるにあたって、東アジアの思想的動向との関連を考察する機会と発表の機会をもてたことは有意義であった。宣長に先行する思想史を東アジアまで視野に入れてみることで、宣長神話観の理解を深化させることができるなど、の成果があった。

それらは主な発表論文等の項目で記すとおりであるが、さらに今後は、本研究の成果をふまえ、「近世神話」論というジャンルの倫理想史的考察の意義を、著書等、様々な形で継続的に成果として発表していく。

研究開始の初年度の成果（雑誌論文⑦）にふれるかたちで、その後の展開の方向を示しておく。

宣長は、日本の神には「場所」がある、と

いう趣旨のことをいっている。この場所の観念が、他の東アジアの諸宗教とその構成を異にするという宣長の主張に着目しつつ、宣長の神話論と前期近世神話論との接点を探したが。この宣長の視野には、キリスト教・蘭学をもすではいっていた。既成の宗教的諸価値の批判は、近來の思想体系もふくめて、それらに通有の位相（それを宣長は「古層」とみる）を見いだすことであった。宣長の近世の多様さへの認識は、朱子学が宗教的価値として受容されたのではない日本の、当の朱子学的世界そのものが宣長に、反面教師的に用意したともいえるだろう。その周到な理解のためにも、宣長に先行する前期神話論と宣長の中期の展開とを連関づける視点の深化が必要となるのである。そのほかの論文等もこうした視点を深化させたものである。

その成果は、方法論的な探求、および先行する石田梅岩の神話的思考の研究等、具体的研究としても発表した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

- ① 清水正之「共感・共苦はどのように終結するか—「あはれ」をめぐる日本の倫理思想から」『日本倫理学会年報』査読有、2010、42-52頁
- ② 清水正之「石田梅岩の新たな相貌—「つよさ」あるいは「よさ」」『公共的良識人』査読無、227号、2010、3-4面
- ③ 清水正之「死生観の教育」と日本思想史研究」『日本史学年次論文集』査読有、2010年度、438-443頁
- ④ 清水正之「韓国民衆開闢思想の多様さと多彩さ—ひらくこととひらかれること」『公共的良識人』査読無、221号、2010、1-2面
- ⑤ 清水正之「気と恨の哲学を聴く—崔漢綺そして東学の思想：流通性と個別性」『公共的良識人』査読無、第215号、2009、6-7面
- ⑥ 清水正之「近世朱子学的世界と東アジアの諸宗教—本居宣長の宗教的観念の位置づけ」『茶山学』（韓国・茶山財団）査読有。No. 13、2008、179-201頁（韓国語）、206-238頁（日本語）
- ⑦ 清水正之「神の「場所」という観念をてがかりに—東アジアの宗教思想空間と近世日本「前期神話論」を序論として」聖学院大学論叢、査読無、第21巻第2号、2008、261-273頁

〔学会発表〕（計7件）

- ① 清水正之「思想史の意義と課題—文献学

から解釈学へ」日本ディルタイ協会（招待講演）、2010、家の光会館

- ② 清水正之「「あはれ」をめぐる日本の倫理思想史から—共感・共苦はどのように終結するか」日本倫理学会、2010、慶應大学
- ③ 清水正之「日本思想史と日本哲学史」京都哲学基金（京都大学）（招待講演）、2009、京都ガーデンパレス
- ④ 清水正之「日本思想史における和辻哲郎の功績」法政大学企画シンポジウム（招待講演）：グローバル化時代の和辻哲郎の思想の射程、2009、法政大学
- ⑤ 清水正之「日本思想とキリシタンの出会い」真生会館講演、2009、真生会館
- ⑥ 清水正之「人聞知の可能性—日本の思想史から」多摩哲学学会第5回大会、2008、中央大学お茶の水校舎
- ⑦ 清水正之「近世朱子学的世界と東アジアの諸宗教—本居宣長の宗教的観念の位置づけ」第2回日韓共同学術会議、2008、韓国安東・国学振興院

〔図書〕（計4件）

- ① 清水正之、東京大学出版会、『ともに公共哲学する—日本での対話・共働・開心』（共著）、2010、318-382、総395頁
- ② 清水正之、東京大学出版会、『「おのずから」と「みずから」のあらい』（共著）、2010、113-136、総374頁
- ③ 清水正之、オリエンズ宗教研究所、『教会と学校での宗教教育再考—新しい教えを求めて』（共著）、2009、総313頁
- ④ 清水正之、台湾大学出版中心、「近世和学的成立與漢学：契沖的方法與本居宣長」『江戸時代日本漢学研究諸面向：思想文化篇』所収、2009、209-235頁、総493頁

〔その他〕

ホームページ等

http://www.seigakuin-univ.ac.jp/scr/faculty/index.asp?pg=kyouin&uu=my_shimizu&sort=&slct=4&ppflag=1

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水正之 (SHIMIZU MASAYUKI)
 聖学院大学・人文学部・教授
 研究者番号：60162715

(2) 研究分担者 該当なし

(3) 連携研究者 該当なし